

## アジア・太平洋研究センター主催

日 時：2012年7月2日（月）

場所：名古屋キャンパス L棟9階 910会議室

テーマ：『蒙古秘史』に記載されるチンギスハンの祖先

報告者：賀希格陶克陶（中国中央民族大学教授，モンゴル国大統領「北極星勲章」受章者）

通訳者：賽漢卓娜（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員，南山大学非常勤講師）

\* 講演は中国語



### 1. 『蒙古秘史』 および研究概況

#### (1) 『蒙古秘史』

##### ○ 13世紀20年代（or 40年代）

回紇（かいこつ，ウイグル族の先祖と言われる）式蒙古文字『蒙古秘史』が上梓された。

##### ○ 構成：①チンギス・ハン22代先祖の系譜および伝説

##### ②チンギス・ハンの伝説

##### ③チンギス・ハンの息子オゲデイ（Ogedei）がハン位を継承してから12年間の歴史事件

\* 回紇式『蒙古秘史』はすでに伝承が途絶えた。現世に伝わっているのは，明朝の漢字音で書き傍訳と総訳が加えた『元朝秘史』で，現在はこれを『蒙古秘史』（以下で『秘史』とも呼ぶ）として研究対象にしている。

◎『秘史』はモンゴル歴史研究において最も重要な古典文献である上、モンゴル高原の古代遊牧民族の歴史文化、さらに漢学研究にとって必要不可欠な歴史文献である。ここ一世紀あまりはモンゴル、中国関係者だけではなく、各国の研究者によって研究され、国際的学術領域として「秘史学」は成り立っている。

(2) 研究概況

○中国：明朝洪武年代～

清朝，民国時代 重要な研究成果あり

○内モンゴル：1980年代以降 重要な成果

巴雅尔《蒙古秘史》(全三册，1980)

亦邻真《蒙古秘史：回鹘式蒙古文复原》(1987)

额尔登泰，乌云达賚《〈蒙古秘史〉校勘本》(1980)等

○モンゴル国：1940年代～

C. Damdinsuren 老モンゴル語で編集，翻訳した『秘史』，謝再善の中国語訳本あり(1956)

○ヨーロッパ及びアメリカ：1840年代～

ロシア正教北京宣教団の P. I. Kafarov, A. M. Pozdneev の研究，S. A. Kozin の研究。ドイツのモンゴル学・漢学大家 E. Haenisch, フランスの東方学大家 Paul Pelliot, アメリカ F. W. Cleaves の研究等

○日本：日本学者の研究成果

1902年，内藤湖南が『蒙文元朝秘史』を発表したことは，日本における『蒙古秘史』研究の皮切りとなる。1907年，那珂通世は不朽の訳注版の『成吉思汗の実録』を出版し，さらに1943年に筑摩書房によって新版し，各種の索引，文献目録，およびその他の従属文献を増加した。那珂通世の訳注の本は日本で出版したもっとも早い全文の訳注であり，『蒙古秘史』の研究の推進にとって大きな貢献をしていた。1939年，服部四郎と都嘎爾扎布は『蒙古秘史』巻1(文求堂)を共著し，音声学の視点から『蒙古秘史』を研究した。1941年，小林高四郎は『蒙古秘史』を翻訳した。1943年，白鳥庫吉は『蒙古秘史』に対して音訳し，『音訳蒙文元朝秘史』を出版した。1961年，山口修の『成吉思汗実録』が出版された。1963年，岩山忍の簡訳本『元朝秘史——成吉思汗実録』が出版された。また，村上正二の『元朝秘史——成吉思汗伝』全3巻は，それぞれ1970年5月，1972年4月，1976年8月に出版された。小澤重男の全訳本『元朝秘史全訳』(上，中，下三巻，風間書房，1984年，1985年，1986年出版)；『元朝秘史全訳続考』(上，中，下三巻，風間書房，1987年，1988年，1989年出版)。この6冊の著作の完成は，日本における『蒙古秘史』研究史上のピラミッドとなった。訳者は，40年間余りを通して，『蒙古秘史』の言語学方面の研究を基礎にし，『蒙古秘史』

に対して進めてきた純粋な言語学の角度の訳注である。

- 韓国，ハンガリ，チェコ，ポーランド，イタリア，トルコ，イラン，インドなどの国でも『秘史』の翻訳本および研究成果が出版されている。

## 2. 『蒙古秘史』に記載されるチンギス・ハンの祖先孛兒帖－赤那（Burte－qina）および後世の3つの異なる記載

◎明朝漢文版『蒙古秘史』は全部で282節があり，第1節の全文は以下の通り：  
成吉思汗の根源。

奉天命而生的孛兒帖赤那（Burte qina），和他的妻子豁埃馬闌勒（Huwa maral），渡过大湖而来，来到斡难河（オナン川）源头的不儿罕合勒敦山（Burhan galdun）扎营住下。他们生下的儿子为巴塔赤罕（Bataqihan）。（余大钧訳）

\* 『秘史』は始めから終りまで難解な問題で充滿している。本報告は，そのうちの孛兒帖－赤那という人物のみ考証する。理由：孛兒帖－赤那は『秘史』の一人目の人物である。もしこの理解を間違ったら，チンギス・ハンの22代の祖先に対する理解，『秘史』全体の理解，さらにモンゴル人起源について誤解を招くことになる。

◎今までの学者は孛兒帖－赤那に対して3つの記載がある

### (1) トーテム説

明朝の漢字音書き，傍訳と総訳を加えた『秘史』では，すべての人名に「名」「人名」「婦人名」と傍訳で書いたが，ただ孛兒帖－赤那の傍訳は「蒼い狼」，豁埃馬闌勒は「白い鹿」と書かれ，後に「蒼狼」「白鹿」と簡略化された。19世紀後半に西欧のトーテム崇拜（totemism）理論が現れた後，この「蒼狼白鹿」説は盛んになった。

### (2) 西藏の金座王の息子であるという説

17世紀のモンゴル歴史文献には，孛兒帖－赤那は西藏金座王の息子であると記載されている。『蒙古源流』では，大臣が金座王を殺し，王の3人の息子は異郷に逃げ，末息子の孛兒帖－赤那は後に巴塔人（Bata）の那顔（Noyan）となった。

### (3) 歴史実在人物説

モンゴル4大ハン国のうちの一つであるイリハン国（II）宰相拉施特（Rashid－al－Din）はペルシャ文で書いた『史集』（Jami'al－tawarikh, 1307－1316）で，“关于蒙古人最初生活的详情，诚实可靠的讲述历史的突厥讲述者说，所有的蒙古部落都是从【某时】逃到额兒古涅－昆来的那两个人（捏古思和乞颜）的氏族产生的。那两个人的后代中有一个名叫孛兒帖－赤那的受尊敬的异密，他是若干个部落的首领，朵奔伯颜与妻子阿闌－豁阿以及若干其他部落都出自他的氏族。他有许多妻子

（哈敦）和孩子。名叫豁埃－马阑勒的长妻为他生了一个…，后来登临帝位的儿子，…，名叫巴塔赤罕。”

（「…すべてのモンゴルの部族はそこから生じた…尊敬される孛兒帖－赤那という政權の座に座る人はいくつかの部族の首領である。豁埃馬闌勒という順位の一番高い妻は…後から帝位に登った息子－巴塔赤罕を生んだ」。

○他にも『多桑蒙古史』、『突厥世系』でも同様な視点をもつ。

### 3. 孛兒帖－赤那と豁埃馬闌勒は狼トーテムと鹿トーテムではない

○トーテムは異なる婚姻集団と氏族のシンボルである。オーストリア原始住民のトーテム信仰はもっとも典型と言われている。

○オーストリア原始住民のトーテム信仰の内容：①ある動物，植物，自然界物を本氏族のトーテムとみなし，狩猟や殺すことをしない，②シンボルであるトーテムで本氏族を命名する，③トーテム・タブー，④トーテム先祖の伝説，⑤トーテムの聖なる物，⑥トーテム聖地。

○トーテム制度の内容：①トーテム・タブーの条例，②トーテム繁殖儀礼，③トーテム巫術

◎モンゴル人の中では，トーテム信仰内容及び制度は存在していない。傍訳による憶測にすぎない。ある民族の深層文化を研究する際にとりわけその民族の一貫とした解釈を重視しなければならない。『秘史』～19世紀末のすべてのモンゴル語で書かれた文献では，トーテムに関する記載は全く見当たらない。

### 4. 孛兒帖－赤那は西藏金座王の後裔ではない

○17世紀のモンゴル歴史文献に孛兒帖－赤那が西藏王の後裔と記載されるのは，11世紀以降の西藏歴史文献上で西藏王はインド王の後裔とされることと関連性がある。『蒙古源流』で記載された孛兒帖－赤那が西藏王の末息子という歴史伝説と，西藏がインド王の息子であるという歴史伝説のどちらも，仏教を伝道するために生まれた伝説であり，歴史的な根拠がない。

### 5. 孛兒帖－赤那は額兒古涅－昆出山後のモンゴル部族の首領

◎以下の信憑性の高い記載が根拠となりうる。

①前述の拉施特『史集』は孛兒帖－赤那に関する記載について信憑性がある。

『史集』は宮廷欽定版であり，資料の出所は，①宮廷が収蔵する『金冊』およびほか保存資料，②各族の学者の口授資料である。

②阿ブ爾－哈齊－把阿秃兒汗（Abul gazi）が著述した『突厥世系』では孛兒帖－赤那について，額兒古涅－昆出山時期の蒙古のハンは孛兒帖－赤那であり，彼は

「乞顔和郭爾羅斯」分枝の後裔であると明記している。著者本人は傑出した歴史学者、かつチャガタイ・ハンの直系子孫であり、先祖へたどる記憶も一部にあると考えられる。

③『多桑蒙古史』では8世紀半ばに孛兒帖－赤那がいくつかの部族の首領であると記載していた。

◎概して、以上ペルシャ語、突厥語、フランス語の三種類の著作は、孛兒帖－赤那に関して、トーテム化でも、仏教化でも、イスラム教化でもなく、現実的かつ可視的な記録であることがわかる。したがって、信憑性があると考えられる。

## 6. 結論

- (1) モンゴル高原では狼と鹿のトーテムが存在しているかもしれないが、孛兒帖－赤那及び妻の名前は、『秘史』で現れたほかの動物名で命名された人名と同様に人間の名前であり、トーテム動物名ではない。
- (2) 『秘史』では孛兒帖－赤那はチンギス・ハンの先祖であると言及したが、モンゴル人の先祖であると言及していない。この記述は正確である。モンゴル人の先祖とならば、紀元前2－3世紀あるいはもっと古い時期の匈奴に辿りつくことになる。これもまた、8世紀半ばの孛兒帖－赤那はトーテム崇拜の時代からかなりかけ離れていることがわかる。
- (3) 孛兒帖－赤那とその妻はトーテムと思われるようになったのは、明朝の『元朝秘史』の傍訳で人名として扱われていないところに起源した。これは間違っていると指摘しねばならない。
- (4) 孛兒帖－赤那は西藏金座王の後裔でもない。
- (5) 孛兒帖－赤那は、いくつかのモンゴルの部族を額兒古涅－昆出山地域から斡難河、克魯倫河、図拉河流域に引き連れた首領である。

参考文献：（一部のモンゴル語の文献は表示できないため、割愛させていただく）

《史记·匈奴列传》。

日・内田吟风等著，余大钧译《北方民族史与蒙古史译文集》，云南人民出版社2003年。

《魏书·蠕蠕等传》，卷一〇三。

《北史·突厥，铁勒传》卷九十九。

余大钧《蒙古秘史》，河北人民出版社2001年。

村上正二訳註『モンゴルの秘史』1チンギス・カン物語・平凡社1970，p9。

小林高四郎訳註『蒙古の秘史』，生活社1940，p26。

Qad-un<nd<s<n quriyanggui altan tob·i·，Улаанбаатар2002。

ШАРА ТУДЖИ·МОНГОЛЬСКАЯ ЛЕТОПИСЬ XVII ВЕКА·，СВОДН

БЫЙ ТЕКСТ, ПЕРЕВОД, ВВЕДЕНИЕ И ПРИМЕЧАНИЯ Н. П. ШАСТ  
ИНОЙ ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР МОСКВА · ЛЕН  
ИНГ А Р А Д 1957. 21。

拉施特主编《史集》，商务印书馆 1983 年。

斯韦茨编辑《早期西方人的旅行，1748-1846》第 2 卷（1904）。

吕大吉《宗教学通论新编》，中国社会科学出版社 1998 年。

沈衛榮《再論〈彰所知論〉與〈蒙古源流〉》，《中央研究院歷史語言研究集刊》第七十七本，第四分册，2006，第 710。

布顿大师著《佛教史大宝藏论》，民族出版社 1986 年。

陈寅恪《彰所知论与蒙古源流（蒙古源流研究之三）》，《国立中央研究院历史语言研究所集刊》第二本第三分册，1931。

【清】耶喜巴勒登著，蘇魯格译注《蒙古政教史》，民族出版社 1989 年。

“Explanation of the Knowable” by 5 Phags - pa bla - ma Blo - gros rgyal - mtshan (1235 - 1280)  
Facsimile of the Mongolian Translation with Transliteration and Notes by Vladimir Uspensky  
with special assistance from INOUE Osamu Preface by NAKAMI Tatsuo, RESEARCH  
INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA, TOKYO 2006.

《法顯傳校注》，章巽校注，上海古籍出版社 1985 年。

乌兰著《〈蒙古源流〉研究》，辽宁民族出版社 2000 年。

ERICH HAENISCH <Eine Urga - Handschrift des mongolischen Geschichts - werks von Secen  
Sagang (alias Sanang Secen) >, 1955 AKADEMIE - VERLAG · BERLIN, 7v - 8r.

索南坚赞著，刘立千译注《西藏王统记》，西藏人民出版社 1987 年。

韩儒林《突厥蒙古之祖先传说》，《韩儒林文集》，南京大学元史研究室編，江苏古籍出版社 1985 年。

希都日古《17 世纪蒙古编年史与蒙古文文书档案研究》，辽宁民族出版社 2006 年。

阿布尔 - 哈齐 - 把阿秃儿汗著，罗贤佑译《突厥世系》，中华书局 2005 年。

《多桑蒙古史》，商务印书馆 1935 年。

（文責：賽漠卓娜，蔡毅）